京都の路地は奥に深いです

空と窓と、

真下魚名

ある日　ビルの窓から空を
見上げたら
大きな魚が泳いでいた

見下ろすと隣のビルの窓が見えて
それはちょっと水槽を覗くようだ

京都は窓と路地とそこから見上げる
空の町

旅行者の知らない
横道を巡る旅

基本的に時系列

飾り窓を眺めて歩くだけ
でも楽しい
花や飾り物が、四季を語り
かけてくる
主の美意識が伝わってくる

明かり取りの窓やろうけど
どないして閉めはるのか
気になる

専用の竿とかあるのかな

壁にささったりせえへんのかな

京都は自転車の町
狭く入り組んだ道が多いから
クルマよりよほど便利
僕は歩く方が好きやけど

壁は黒の塗り壁
渋い

窓は新調しはったのか
けど、ちょっとガラスが
波打ってる気がする

枠だけ変えた？

見かけはぼろいけど、
凝った作りの窓や
周りがビルやなかったら
張り出しに腰かけて
煎茶をすすりたくなる
もう作られへんのやろうなあ

扇屋さんやからね

数奇屋
二階に丸窓
塗り壁、焼き板塀に青松
こんな花札なかったかしら

日よけ、雨よけ、風よけ
なんでもござれの
万能すだれ

この木は、いったい
どう成長したかったんか

見るたびに惚れ惚れとする
モダン建築のなんとか医院
と
定番の飛行機雲

アルバイト募集中

こぎれいで小さな店が
これでもかというぐらいに
あって、
それでもやって行けるのが
不思議

通り抜け

隠すようで開いている
開いているようで
見えなくしている
この町の家には微妙な
仕切りがある

どこにでもあるのではないけど
こんなところに、こんな店が
あるの、ということが
よくある

多分現役でつこうてはる
この禿げ方で現役
で、この貫禄
木はやっぱりすごい

張り出し窓は、部屋を
拡張する

本を置いたり、植木鉢を
飾ったり

まるで一間増えたように

ただの物置になってるかも
しれんけどね

うーん
何屋さんなんだか、全然
わかれへん
入ってみる勇気もない

直行する線と平面
の中にちょこっと有る
小窓のアール
鱗のようにボワッと光る窓
う、美しすぎる、、

はめ殺しっていう言い方、
ちょっと怖いけど
はめ殺しの丸窓

この窓は、ペンキが厚すぎて
開くように見えない。

そこまで刺刺しないといけ
ないのか
やはり幕末を経験した町は
備えが違う、のやろか

町家を、住居として残すことが
難しくなっている
こうしてお店として改装して
はるところが多い

けど、おくどはんのない家は
もう町家とはちがうと思う

路地は「ろじ」では無くて、
「ろおじ」

レトロ・モダン
何を思ってこんなデザインに
したのか

向かいの南座に負けていない
のがすごい

レトロ・フュージョン
なんて言葉は無いけど

格子も無く、中が見える
窓って、ここでは実は珍しい

正月はしめ飾り
夏は厄よけの粽
年中なんか飾ってはるのが
京都の玄関

窓が多いのは、風通しのため
暑い夏を過ごしやすくする工夫
けど、通りに面しているので
格子をはめ込んである
それがまたきれい

鍾馗さん
家を守ったはる
どこにでも居てはる

ひまわりのシール
昭和の香りが

路地
狭くて長いが、ところどころに
横道はある

その横道から、たまに地の人
ではないクルマが迷い込んで、
偉い目に会うてはる

こういうのが、京の粋（すい）
かな、と思う

こっちはにへらと笑てる
ように見える

冬でも簾を下ろしっぱなし
なんは、花街やからやろうか

ながーい太巻きが出来そう

ゆかしい

くりぬきの形だけやのうて
下辺の微妙なそり具合
たまらんなあ

横っちょのは、状差し

元はたぶん、洋食屋か喫茶店
こういう店がひっそり消えて
行くのはおしい

道の端に椿
こういうのも京都らしい
まだ芽はかたいけど
咲いた頃に、また見に来たい

つづく、、、、